



S A I H I K A 2 0 1 6 0 6

# SAIHIKA201606

モク「モクレンと」  
ジ「ジーサンの」  
モクジ「目次レディオ！」  
モク「待って、誰！？ 何でジーコロちゃんの代わりにお爺さんが！？」  
ジ「ふおっふおっふお。孫は今日は来れないのでな。代役として駆けつけたんじゃ」  
モク「いや、え……？ あの、スタッフさん今日は本当にこれで——あ、はい。頑張ります」  
ジ「今回は第三回にして新コーナーじゃ。その名も『気になるあの子のプロフィール！』」  
モク「ジーコロちゃんいないのに新コーナー始まっちゃったよ……」  
ジ「さて、リスナーからも二人のプロフィールが知りたい！ とのことなので、ここで発表していくのじゃ。まずは僕からじゃな」  
モク「違う！ 絶対違う！ 二人ってどう考えても——」  
ジ「ジーサン76歳じゃ。職業はラジオ局の局長をやっておるぞ」  
モク「なん、だと……？」  
ジ「可愛い孫がアイドル活動、略してアイカツするらしいと聞いてな。とりあえず近場のラジオ局を買収したんじゃ。これで孫の喜ぶ顔が見られると思ったんじゃが……」  
モク「マネージャーさんから偶然大抜擢されたと聞かされていたけど、そんな裏が……」  
ジ「ジーコロちゃんと喧嘩になってしまった。『私はそんな方法で選ばれても嬉しくない！』と怒ってやったよ」  
モク「もしかして、今日ジーコロちゃん来なかったのは……」  
ジ「そうじゃ。全ては私のせい。私は責任を取って局長職を辞任するよ……」  
モク「お爺さん……」  
ジ「私が辞任する以上、この番組が存続するかは二人の人気にかかっておる。頑張れよ」  
モク「はいっ……！ では——」  
モクジ「また来週ー」  
スタッフ「ああもう放送事故だよ！ 終わったなこの番組！」  
モクジ「ですよね……」

表紙： 鵜和	1
目次：SAIHIKA201606 ラヂオ版3 マウス	2
小説：	
君のいない世界はこんなにも素晴らしい T.K	3
純粹なる世界を持つ彼女たちへ 矢野ヒカル	14
キュウセイの魔女とその騎士 マウス	20
From Writers 最低限の光 矢野ヒカル	35

君のいない世界はこんなにも素晴らしい

「く」

バカでかい扉を開けたその先。王は玉座の肘掛けに頬杖をつき、静かに座っていた。そうしているだけでも、威圧感はさっきぶっ倒したガロンの比じゃねエ。つるつパゲの頭に眉間に濃く刻まれた皺、蓄えた髭、座つてもわかる体格のデカさと、どこをとつてもヤバいオッサンだ。喉が焼けるほど暑い室内が、絶望感を後押ししてやがる。

だがこうやって対峙するつてのは、昔からよくあつた。いつもと違うのは、今から殺し合いを始めるつてコトくれエだ。別に何を思うこともねエが。

「大人しくゼロアスを渡すつてんなら、殺しはしねエ」

オレは剣を構え、ゆっくりと歩いて行く。

王もまた、緩慢な動きで玉座から立ち上がった。

「そのような生半可なことをほざいているうちは、何時になつても儂に勝つことは出来んぞ」

「……漢同士、議論の余地はない」

幼い頃から何度も、目の前のオッサン、ガイスト・フェンリルに説教を食らつてきたことを思い出し、既に敵となつた漢の目を見つめる。

「相手が気に食わねエなら、拳で語れ。……それが例え、育ての親であつても、だろっ」

王は何も言わず、ロアで大斧を出し、手に持った。

「んなこたアわかつてる。そのために此処まで来たんだから……なア！」

オレは複数の氷柱をオッサンの周囲から中心へ向かつて伸ばした。それと同時に走り、オッサンとの距離を一気に詰める。

「ひより！ テメーら！ 最初から全開で行くぞー！」

「わかつた」

「イエッサー！」

ひよりと連れてきた三人の兵士は散り散りになつて王の隙を窺う手筈になつている。数の上では一对五だが、それでも勝てるかどうかはわからねエ。先のガロン戦で予想外に消耗させられたからなア……勝敗は代償を温存させたひよりの力にかかつてるのが誤算だ。

まア、いくら考えても、オレが斬り込まなければア始まらねエ！

オッサンがオレの剣の間合に入るギリギリのところまで氷柱は一瞬にして砕かれ、目の前に大斧が迫る。

オレはそれを無視し、こちらにもう一步踏み込んで剣を突く。大斧はオレに当たる寸前のところでひよりの一矢に軌道をズラされ、オレの髪を掠めて空振りした。

一方オレの剣はオッサンの腹を確実に捉え、突き刺した。その状態で剣先から氷柱を伸ばせば終わる。

はずだった。

実際は、剣先が音もなく蒸発し、オッサンの体には傷一つ付いてはいなかつた。そこから氷の剣の形状を元に戻すことすら、出来はしなかつた。

一瞬思考の止まったオレの体を、今までに食らつたことのないほど重い拳が部屋の端まで吹っ飛ばし、壁に叩きつける。全身を強く打ち、激しく頭を振られたオレは歪む視界の中でオッサンを睨みながらも、ただただ血を吐きながら

咳き込むことしかできなかった。

「儂の手の内を全て知った気にもなっておったか」

オッサンは失望したような目でオレを見た。

クソほどムカついたが、まさしくその通りだった。

オレはオッサンと何度も戦ったことがある。試合という名目だったが実践と何ら変わらない。オレに実力がついて軍の幹部になってからは、オッサンに手を抜かせたことはないと思っていた。勝ったことはなかったが、それが王と王でない者、ゼロアスを持つ者と持たざる者の差のなだと、逆に言えばそれだけの差のなだと、そう思っていた。

だからオッサンの知る由もない、オレとひよりの連携ならば倒せると、そう信じてここまで来た。

だが結果はどうだ？

一撃で伸されて体を動かすことすらままならぬエ状態だ。

情けねエ。

つくづく自分が嫌になるぜ……。

「ヴェル！」

「隊長殿っ」

ひよりと三人の兵士たちが透明化のロアを解き、オレに駆け寄ってきた。

見たこともないような不安げな表情を浮かべるひよりの顔を見て、はっと目が覚めた。

オレは軋む身体を無理やり起こし、兵士の一人に剣を渡すように言った。そいつは鞘から剣を抜き、オレに渡した。氷でできたものではなく、ごく普通の、ありふれた剣だ。

その剣を床に突き刺し立ち上がるうすると、ひよりがオレの顔面に、べしん、と軽い掌底をした。

「……何しやがる」

「ヴェルのほうこそ。怪我人は、大人しくしてて」

ひよりは兵士三人に目配せをすると、オレに背を向け弓に矢を番えた。

「おいバカ何しようとしてんだ！ やめろ！」

オレの言葉に何も反応せず、ひよりの姿は消えた。

「クソッ。テメーら離しやがれ！」

今度はオレを拘束する兵士を振りほどこうとしたが、もともとオレは体格が良くない上に三人に抑えられているともなると、どうにもこうにもならなかった。

「テメーらの指揮官はオレだ！ 何でひよりの言うことに従ってやがる！」

「ひより様が、その指揮官殿に死なれては困る、と……そして俺たちもそう判断しました」

「……畜生、尤もらしいこと言いやがって……！」

ひよりは良くわからないが城の兵士たちにも隠れた人気があったりするからなア……まさかそれが革命軍のほうにも伝染してるとは。こうなったらもう何を言おうと無駄だろう。ロアで怪我を回復させつつ、五感が少しでも元に戻るのを待つしかねエ。

オレは取り敢えず暴れるのをやめ、戦いを見守ることにした。

ひよりが消えて少し経つが、オッサンは非常に警戒しているようだった。癪に障るが当たり前のことだ。

ほとんどの者の適性が炎であるフェンリルの国民とは違い、どんな方法で攻

撃してくるかはわからず、見たのは先の一矢のみ。あのオッサンでも慎重にならざるを得ない。

しかし裏を返せば、ひよりはその「未知」という有利さを失ってしまえば戦闘経験で圧倒的に劣り、勝てる見込みは限りなくゼロに近くなる。

さあ、テメーは一体どうするんだ……？

まるで時間が止まったかのように緊迫感が張り詰めた空気が続く。

それを斬り裂くかのように、オッサンから見て左後ろの上のほうから矢が現れる。矢は頭に向かって真っ直ぐに飛んだが、オッサンは左手を上げて背後に回し、矢を弾いた。

甲高い音を鳴らしながら、矢が床に落ちた。

一体どうなってやがる……？

あれを防ぐのはオッサンなら造作も無いことだろうが、オレからもひよりが見えてねエってことがあまりにも不可解だ。

ロアを二つ同時に扱うことはできねエ。例え、ゼロアスと契約した者であってもだ。だがひよりは透明化したまま空中から矢を放った。

オレがひよりの攻撃方法について思考を巡らせている間にも、オッサンには四方八方から矢が飛んで行く。

オッサンは手に持っていた大斧を床に斜めに突き刺し、矢をあるときは手で払い、あるときは避けながら全てを捌いていた。

凄まじい矢の雨が降り注ぐが、あるとき、矢の出現が止んだ。オッサンはまだ矢をいなししているから気付いていないかもしれないが。

同時に、オッサンの背後へ走る人影が見えた。

オレは叫びたくなったが、それをしてしまつてはひよりの折角の作戦が無駄

になる。ぐつと堪えた。とは言うものの、オレは今すぐにでもひよりを止めたかった。

アイツにとっては練りに練った作戦なのかもしれないが、自分の適正さを捨てて近接戦闘を挑むメリットなどどこにもねエ。虚を突くことはできるかもしれないが、所詮それはただの子供騙しだ。

オレはひよりとオッサンの間に氷の壁を作る準備をした。

オッサンが最後の矢を弾いた時、ひよりの構える剣はもう、オッサンに届きそうなところまで迫っていた。対するオッサンは矢を躲すために大斧まで微妙に手が届かない場所に誘導されている。

これはもしかするんじゃないかねエか、と一瞬でも思ったのが不味かった。

既にわかっていたかのように、オッサンは一瞬で身体の向きを変え、ひよりに炎を纏った手刀を振り下ろす。

オレは咄嗟に氷の壁を作つたが、無意味だった。

オッサンの手刀はいとも簡単に氷を溶かしながら砕き、ひよりの首に直撃する。

頭の中が絶望で真っ白になった。それは一瞬にして激昂に変わる。言葉にならない怒声を上げて、オレは兵士を三人とも吹っ飛ばして立ち上がった。

「これで、終わり」

そのとき、真横から声が聞こえた。

聞き慣れた、声が。

『強の二矢』

オレの真横から一閃、矢が放たれる。

速すぎる矢は軌跡だけが光の残像となって残り、気付いた時にはそれはオッ

サンが咄嗟に出した大盾に突き刺さっていた。

隣で、ひよりが崩れるようにその場に座り込む。

「っ……」

どうやらオレとオッサンが見ていたのはひよりの幻影だったらしい。大量の  
弓矢すら囷にして意識の外から強烈な一撃を叩き込むなんて、相手がこのオッ  
サンじゃなければ勝負は間違いくなく終わっていただろう。

あの大盾も見ることがねエ。恐らく、防御手段の奥の手だ。

ひよりもほとんど代償を使いきって、ろくに戦えるヤツは残ってねエし、次  
の一手はどうしたものか……。

オレが悩んでいると、オッサンが構えていた大盾をゆつくりと下ろした。刺  
さっていた矢が抜けて落ちる。そこには確かに、貫通した穴が開いていた。

もしやと思い、ひよりを見るとにやりと笑っていた。

そこでオレはやつと、二矢という意味を理解した。

なんてヤツだ。オレは全快のときに戦っても果たしてひよりに勝てるのか……

……

「どう？　ちなみに、ずっと横にいた」

「……マジかよ。ならあの弓矢は一つ一つジレットを仕込んでやがったのか」

「」名答。欠点は、準備に時間がかかること」

オレは思わず吹き出した。

「違いねエ」

ひよりへの賞賛はオッサンも同じようで、

「……見事だ」

と苦しそつに言った。それに対してひよりは嬉しそつだった。

「敵を騙すには、まず味方から。覚えておいて」

「そうだな。だが、惜しい」

オッサンが大盾を消すと矢の貫通した位置が鎧の穴からはつきりとわかる。

それは明らかに心臓からズレていた。

さらに周囲の組織を焼いたのか、致命的な出血量ではない。

「……！　何で。私は、確かに急所を……！」

「身体を動かしただけの、単純なことだ。それでも、間一髪であったがな。さ  
あ、続きと行こうではないか」

オッサンは床に突き刺していた大斧を手にとった。

「ひより。そこを動くなよ。テメーらはひよりを守れ」

「イ、イエッサー！」

「ヴェル、無理だよ……！」

オレはさつっきのお返しと言わんばかりに、何も返事をせず剣を構えてオッサ  
ンへ向かって走った。

オッサンは突撃してくるオレに対して大斧を振るう。

それを鋒を床につけて剣で右に受け流し、大斧の重さなくなる瞬間に斬り  
上げた。オッサンは一歩後ずさりして簡単に避け、姿勢の低くなっているオレ  
の腹の辺りに右足で蹴りをいれる。

さらに姿勢を低くし、振り上げた剣を左下に下ろしながら右足を軸にして回  
転し、床に刺さった大斧の柄の下を潜り抜け、オッサンの側面へ行く。

再度斬り上げると、オッサンは今度は大斧の柄を使って防御し、同時に大斧  
を持ち上げて斬りかかってくる。

オレは剣を引いて、それを床に突き刺し、ロアで強化した。床を右に強く蹴

り、剣の柄を握って回転し、そのまま剣に全体重を預け、頭が下になるほど足  
を上げてオツサンの顔面に蹴りを入れる。大斧は剣に当って激しい金属音を鳴  
らした。

「ぬう……」

小さな呻き声を上げたオツサンは大斧を離してオレの足を掴み、一旦上に振  
り上げてから床に叩きつける。さつき吹っ飛ばされたときよりはマシだが、十  
分すぎる痛みが全身を襲った。

だが、振り上げられたときに剣を抜き、叩きつけられるときにオレを掴む腕  
を斬りつけておいた。

オレはオツサンから離れるようにして転がり、立ち上がった。

「痛み分けたな」

オツサンの腕からは血が流れていた。

「あとオツサン、その異常なまでの体表温度はオレ対策か？」

掴まれてみて、やっとわかった。こいつア、常に炎を纏っているくらいの熱  
を発している。オレを掴んだオツサンの手を凍らせようとしてなけりゃあ、オ  
レの足の皮膚が焼け焦げていたくらいには熱い。

この部屋が暑いのはいつものことだったが、十中八九、今は原因が違う。い  
つこのようなときが来ても良いよう、普段から準備していたらしい。苦勞な  
こったぜ。

「今のやり取りで良くそこまで見抜けたものだ。これはフェンリルに代々伝わ  
るエファリアル。儂が王になってからこいつを見るのは、お前が初めてだ。誇  
るが良い」

高温のせいでかいていた汗が、冷や汗に変わって首筋を流れ落ちる。

「誇るだつて？ ……冗談じゃねえよ」

オレは剣をより強く握った。

エファリアルというのは、それ自体がジレットである防具を指す。つまりあの  
オツサンはほんの小さな代償のみでオレの氷を容易に溶かす高温を纏ってるつ  
てこった。しかもさつきひよりがやったように、ジレットと同時にならコアも  
使うことができる。エファリアルに込められた代償が尽きればただの鎧になるが  
……それを待っている時間が果たしてあるのかどうか。

面倒なもの持ち出してきやがって……！

「はあ……」

オレの氷は通じねえし、そもそも戦えるヤツがもういねえ。頼りたくはな  
が、もうアイツに任せるしかなさそうだ。

深呼吸をして、もう一度オツサンに斬りかかった。斬撃の応酬の最中、プー  
スト、強化、と最低限のロアを使い、五感をギリギリのところまで保たせる。

太刀筋が鈍っていくのが、自分でもわかる。それでも戦い続けなければなら  
ない。諦めるのは、死んだ時だ。

そうしてオツサンと斬り合っていると、懐かしい、昔の思い出が蘇る。あの  
頃もこんな風に、必死に、戦ってたなア。

オツサンに振り下ろした剣が、手甲によって止められた。もう金属を断つこ  
ともできないほど、オレの剣が軽いことを見抜かれたらしい。

「クン……ッ……」

大斧がオレの左肩から右下にかけて斬る。

オレは剣を離し、後ろに倒れた。

「上手く避けるようになったな。儂は貴様を両断するつもりだった」

「皮肉ってんじゃねえよ……」

確かに傷はそれほど深くはないようだったが、出血は相当だ。オレが動けなくなるには、十分な深手だった。

オレを見下ろすようにオッサンは立ち、大斧を振り上げた。

「やらばだ」

結局は行次が来るまで時間を稼ぐことが出来なかった。

まア、ひよりの適正は逃げるのに役立つ。心配はないだろ。

オレは、意識を手放した。

「ヒーローは遅れて登場するものだよね」

と思つたら、バカでかい金属音と聞いたこともない女の声に驚き、目を開けた。

「遅れ過ぎもどつかと思っけど。あんまり間に合つてないし……」

行次ともう一人、よくわからない女がオッサンの大斧を剣で止めている。

「さあ、反撃の狼煙！ 天才美少女カホちゃんにお任せっ☆」

変な喋り方の女は剣でオッサンの大斧を跳ね上げると、目にも留まらぬ速度でオッサンとの間合を詰め、左腕を斬り、いつの間にかオッサンの背後に立っていた。持つている剣は長さを変え、短剣になっている。

「つて熱っ！ この速さで斬つても熱いなんてヤだなー。武器持つてられない

じゃん。ほんとエフアリアつて面倒だよねー。サイアクー」

「オイ行次、このウゼエ女は一体誰だ」

「それが俺もよくわかんないんだよね」

「ハア!？」

「ちよつとヴェルくん、命の恩人に向かつてウザいと言つちやダメなんだか

らねー」

ぶくーつと頬を膨らませて人差し指を左右に振るところが余計ウザかったが、もうツツコむ気力がなかった。

「わわっ」

そんな風に悠長にオレに説教なんて垂れているものだから、謎の女はオッサンに斬りかかれていた。

が、ふざけた言動ながらオッサンの攻撃をあつさり躲す。

「もう、いきなり来るからびつくりしちゃったよー」

「次は貴様が相手なのだろう。構えろ」

「まあそういうことになつちやうかな？ というかもしかして真剣勝負邪魔されて怒つちやつてる？」

「……………」

「やだもー、こわーい。オジサン、『ヤ』の付く職業の人みたい☆」

「テーマ何であんなヤツを連れてきやがった」

「うん。ごめん」

さっきの動きは確かに凄まじかったが、このアマは本当に戦力になるのか疑わしい。今も変な口調で無駄口叩きながらよくわからない動きをしているし、不安でしかない。

「じゃあそろそろ、始めよつか」

女の目付きが変わつた瞬間、纏っている空気も変わった。

それを察知したオッサンが大斧を構えたが、遅かった。気付いた時には女は空中を飛んでいて、オッサンの右肩を真つ逆様の体勢で斬りつけた後、身体を捻つてあり得ない軌道を描きながら次は左脇腹を斬り、一回転して地面に降り

立った。

「ダメだなあ。これに反応できないようじゃ、カホにかすり傷一つ付けられないよ?」

ふざけた口調はそのままだったが、声のトーンは落ち、話の内容は冗談でも何でもないとわかった。今のは辛うじて目で追える動きだったが、最初のは斬った瞬間と着地したところしか見えなかったからだ。

認めたくねエ……認めたくねエが、強いなコイツ……。

「オジサンもさつさと本気だしてね。……じゃないとすぐ死んじやうよ☆」

女は暗い笑みを浮かべた。

### 第十三話 「一夜戦争・四」 完

次回、第一章最終話「夜明け」

○あとがき

どうも、1クです。

今回は最終話です。二章に続くかどうかは書き終わってから考えますが、取り敢えず一区切りは付く形になります。

いやあ、長かった！ こまで本当に長かった！

特に今回の話はキツかったです。最初から最後まで、七千文字近くがほとんど戦闘シーンですからね。

全員の見せ場作るうと思つてどうしてもこうなるんで仕方ないんですけどね。お陰で戦闘シーンの描写はかなり上達してきましたと思います。初期と比べて、ですけど。

あと個人的に「強の二矢」がかなりのお気に入りネーミングです。あれ実はめっちゃ強いんですよ。詳しくは設定資料集をどうぞ。更新箇所がわかりづらいとの指摘を受けたので【】をつけてわかりやすくします。

今回のやつについてはこんなもんですかね。たぶん総評みたいなものを次回のアとがきで長々と語ると思つので。

というわけで昔の話をしましょう。今回出てきたカホさんは数年前に書いていたまっくろくろ歴史のキャラの一人「双葉 音羽」の口調を取ってきてガルパンの婚活戦士ゼクシィ武部さんの口調を少し盛り込んで完成されています。

ただし元の二人のキャラとは性格は似てません。カホは割りとやばめのキャラです。まあ次回にでもわかることでしょう。

さてあとがきはだいたいこのへんで。

この後はいつものように設定資料集となっております。  
ではまた次回—。

## ○人物紹介

ほした ゆきじ  
・穂下 行次

主人公の片割れ。高校一年で、年齢は一五歳。身長は一七五センチ、体重は六〇キロ。中肉中背で平均的な体型。かなりの短髪で髪の毛が少しツンツンしている。黒髪。顔立ちが良いほう。爽やか系な見た目は裏腹に、内部は変態的。

代償は『感情』、現時点で判明している適正は『移動』

・ヴェルデスト

もう片方の主人公。フェンリル王直属の部隊員で、年齢は一八歳。身長は一六九センチ、体重は六五キロ。身長に恵まれなかったが、その分ムキムキマツチョマン。髪は長めで目が隠れている。少し癖つ気のある赤髪。目つきがかなり悪い。目を隠すと人相が悪いのが多少マシになるからそうしているらしい。見た目に違わず好戦的で荒つばいが、一方で他人のことを気遣う一面もある。ツンデレ。

代償は『五感』、現時点で判明している適正は『氷』

・ノーリス・レクエンス

行次くんサイドのヒロイン。フロレリヤド・レクエンスのお姫様で、年齢は二三歳。身長は一五五センチ、体重は四三キロ。体型は少し細め。髪はストレート、腰くらいまである。髪は蒼く、目も蒼い。ついでに蒼いワンピースを好んで着る。端正な顔立ちで、一挙手一投足に品格が現れる、ザ・お姫様。ただ、同年代の友人がいなかったために行次たちといると歳相応の表情を見せたりも

する。

代償は『自由』、現時点で判明している適正は『水』

・築山 ひより（つくやま）

ヴェルサイドのヒロイン。高校二年で、年齢は一六歳。身長は一三九センチで、体重は三八キロ。とにかく背が小さい。髪は腰くらいまでのショートカット。黒髪。背丈を反映してか顔立ちも幼いが、無表情でいることが多いので、幼い印象は少し中和されている。見た目に反して物言いも行動も直接的。

代償は『五感』、現時点で判明している適正は『弓』

・ニルナ

ノーリスお付きのメイド隊の隊長。ノーリス以外にはだいたい反応が冷たい。常にノーリスの一番近くで仕事をしているだけあって、フロレリヤド・レクエンスではノーリスの次に強い。

・ガロン

でかいオッサンその一。一対一であればヴェルに勝てるほど強いが、築山さんと連携をとられたために敗北した。一応、軍では一番偉い。見た目はヴェルが言うには、「虎」らしい。

・ロガル

でかいオッサンその二。行次くんにはポコポコにやられたけど、普通に強いオッサン。実は話好き。見た目は、行次くんが言うには「クマ」らしい。

【・ガイスト・フェンリル

でかいオッサンその三。というか第一章のボスみたいな人。ヴェル曰く「つるつバゲの頭に眉間に濃く刻まれた皺、蓄えた髭、座つてもわかる体格のデカさと、どこをとってもヤバいオッサン」。そう、ヤ〇ザを体現したかのような人。その外見に見合つて実力も桁違い。

代償は『五感』、現時点で判明している適正は『炎』】

・カホ（お隣さん）

行次くん家のお隣さんであり、行次くん、築山さんと同じ学校という以外が一切不明。ロアが使える上に、行次くんのことをよく知っている。フェンリル王と戦えるくらい強いが如何せん喋り方がウザい。

代償は『不明』、現時点で判明している適正も『不明』】

・穂下 和花

行次くんの妹。本編では電話でのみ登場。穂下家の母いわく、現在行方不明。

・一左多 歌遠

学校で、行次くんの前の席に座る人。意外と重要人物。

○用語集

・ロア

物語の舞台となるファンタジー世界での「魔法」みたいなやつ。自分が最も失いたくないと思うものや、他の人間より優れた何かが使用者本人から失われ

る。ロアを使うにはゼロアス（後述）と直接契約するか、ゼロアスと契約した人と契約しなければならぬ。後者の場合、『子』の契約となつて契約主の一存で使えるロアを制限されたりする。他にも様々な点で不利となる。

失う代償は契約した時点で固定される。ゼロアスと契約した人と契約すれば失う代償はその人と同じとなつて固定される。ちなみに、ゼロアスと直接契約した人は、年月が経つたり価値観を揺るがす出来事があったりしたあとで再度契約をすると失う代償が変わつたりする。

基本的にそれ相応の対価を支払えば何でもできる。目には目を歯には歯を。ただし、自分の持つ代償を使い切ると、それ以上ロアを発動することはできなくなる。例外を除いて、代償は時間経過で回復する。

ゼロアスにあるエリアル（後述。簡単に言うとならびライブラリ）から呼び出して使用するけど、慣れると別にページめくらなくてもいい。それどころかトリガー（主人公がやつてるまばたき）も必要ない。これの意味はルーチン化することでロアを使いやすくするだけ。でも慣れないやつとか適正がないやつはペーヂをめぐる一連の作業をしないと正しく発動できない。無理にやろうとすると本来得られる効果よりしょぼくなつたり、いたずらに代償が奪われる。

・ゼロアス

国の象徴。王以外何人たりとも触れてはならない神聖なもの。その正体は強力な武器であり、ロアを記録しているエリアルを内包している。フロレリヤド・レクエンシアのゼロアスにはリリース様なる意志も宿っている。

これと契約することでロアを使用可能になる。それだけでなく、契約者の意志に従つて形状を変化させられる上に、ロアを使用する際に奪われる代償が多

少軽減される。

・ジレット

別名「遠回りの代償」。魔法陣のようなもの。というか、そのまま魔法陣。

唯一、誰もが使えないことのできる代償の形態。その正体は発動を遅延させ、発動時にあたかも代償を払っていないかのように見せかけた【ロア】なので、自分がロアを発動すると同時に使うこともできる。】

複雑な模様をした魔法陣を描くのに時間を消費することで、そこに代償を込める。ただしジレットを書くとき代償を奪われるということはない。基本的には代償が自然回復するのと同じ速度で代償を込めるから。時間が惜しいのなら代償を払ってジレットを早く描くこともできない。

一見描きためておけば有事に便利そうだが、ジレットが描かれてから時間が経つほどそこに込めた代償は失われていく。また、ジレットそのものへの損傷（薄れたり消えたり）があるとその分だけ込めた代償は失われる。

ジレットを用いてロアを発動すると、ジレットは消える。

・ガウォリアとエファリア

ロライズア（ロアのカテゴリ）の中にあるガウォリアルとエファリアの元になった語。ガウォリアは代償武器、エファリアは代償防具。職人として才能のある者のみ作ることができる、ジレットが組み込まれた装備。本編ではいろいろな謎のままなので「ここでも謎のまま」。

ロガル（行次くんと戦ったオッサン）の武器はこのガウォリア。

【フェンリル王もエファリアを身につけて戦っている。】

・フロレリヤド・レクエンシア

主人公が降り立った国の名。花と水と乙女の国。女性しかいない。これには深いわけがある。まあそのうち。

言語はフロレリア語で、通貨はレクス。国民はみんな姫様と契約しているの  
で「自由」の代償。死因はほとんど老衰の平和な国。だいたい姫様のおかげ。  
人口が千五百人くらいしかない小さな国。

・フェンリル

もう一人の主人公であるヴェルデストの生まれ故郷である国。炎と鋼鉄と漢の国。男性と女性の比率はどっこいどっこいだが、なぜか汗臭さと泥臭さが際立つ国。工業、特に金属製品が盛んで、漢たちが憧れる職業第一位が刀鍛冶である。この国ではロアを使わなくても戦える方法（ロアが尽きてもなお戦うことができる方法）を模索しており、その一つが先述のガウォリアとエファリア。

・透明化のロア

身につけている衣服も、荷物も、影すらも透明化する。そういう意味では透明化ではなく、認識されないと云ったほうが正しい。

さらに、透明化の範囲は自分だけに留まらず、目に見えるものなら特に制限なく透明化ができる。ただし、透明化するものの多さに対してそれ相応の代償が支払われることになり、透明化が解除されれば、また透明化するのに代償が必要。透明化している時間はあんまり代償に影響してきません。そりゃあ、一ヶ月とか透明化していると延滞料金が発生する（比喻）が、一日程度なら問題がない。

前は築山さんがこれを使って偵察部隊をやっていた。隠密行動できるのでかなり強いが、ヴェルくらいになるとガロンのように仁王立ちしてる相手なら気配（オッサン特有の匂い）でなんとなく察知できたりするので注意が必要。

【今回も築山さんがこれを使って健闘していた。矢に描いたジレットを用いることで消えながら一方的に全方位攻撃ができる。その代わり準備が面倒。あとジレットの性質上、相手との距離を一定にしないと矢が正しく命中しない。】

### 【・『強の二矢』<sup>トウゴウ</sup>】

築山さんが発動した『弓』の適正でかなりの代償を消費するロア。築山さんはこのロアを使って嗅覚・味覚・聴覚の大部分を代償として使いきった。技としてはロビン・フッドみたいなもの。ロアで亜音速かつ高硬度の矢を二本ほぼ同時に放つ、ほとんど防御ができない技。一の矢で空気を斬り裂き、二の矢の経路を真空状態にして矢のブレと加熱を防ぐ。

今回のように盾で一の矢を辛うじて防いでも、本命の二の矢で貫通される。そういう意味で「強の二矢」。一の矢は十分威力は高いがただの布石です。ちなみにあの盾も「盾に込められた代償が尽きるまで貫通しない」というエフィアリアの試作品だったが、築山さんに瞬殺された上に、オッサンが着てるエフィアリアの鎧まで貫通している。なので今回オッサンに一番ダメージを与えたのは間違いなくこのロア。】

### ・意思疎通のロア

行次くんが初めて会った時におでこをぶつけて発動したのがこれ。汎用性が高く、様々なところで使われるロアには専用の動作が付随している場合

が多い。これもその一つ。対等な立場であれば額をぶつけ、上下関係があれば階級が上の方が相手の頭に手を乗せる。行次くんがヴェルの頭に手を乗せたのは「それでもできるよ」と姫様に言われたため。行次くんはそんなのわかってないし、ヴェルも負けたんだから当然と思ってるため特に諷いてもなかった。効果としては、意思疎通のロアを交わした相手とは、話した言葉が双方向で自動的に翻訳される。さらに少しの代償を支払えば声が直接届かない相手にでも「こいつ……！ 頭の中に直接……！」という真似ができる。

前はこれを活用してヴェルが全軍の指揮を執っていた。使う代償も少なくてとっても便利。

【今回は本編の裏で八人衆が意思疎通のロアで全軍指揮をとっている。】

### 【・幻影のロア

それなりの量の代償を払い、自らと完全に同じ見た目の影を操るロア。影なのでどんな動きでも可能だが、当たり判定はなく、こちらからは攻撃できないし向こうからも攻撃されない。幻影を操る方法と本体の身体の状態にいくつかわりエーションがある。

今回築山さんは透明化のロアを解いて自分の身体を完全に無防備にし、全ての意識を幻影に集中させて操っていた。もともと築山さんの適正からはズレており、簡単に扱えるものではなかったからだ。オッサンが築山さんの本体に気づかなかつた理由は作中で言っている通り、矢の雨の陽動と大斧から露骨に離れさせるプラフ。そして築山さんがヴェルの隣にいたこと。自らの周囲近くに全神経が集中していたために、オッサンは幻影に反射的に殴りかかってしまった。】

——純粋な女の子の願いが叶う世界——

古川都季子(キコ)と乙音このは(ネコ)のキコネコンビに課せられた最初のミッションは謎の研究室に囚われた純粋少女を救い出すこと。一般人の警備員なんてチョチョイのチョイとやっつけたら、向こうの純粋少女と戦うハメに？

純粋なる世界を持つ彼女たちへ 三

矢野ヒカル

デデデデー

「悲しみの精霊使い、宮浦九九」

デーデー

「コスプレ系ピンク女 古川都季子」

バトル!!!

◎エキシビション

『ついに純粋少女同士のバトルが始まった。今回は初めてのバトルということでエキシビションを私、聖良がお送りするよ!』

『コマンドは「物理」「精神」「特殊」の3つ』

『「物理」ではナイフとか拳を使って相手を攻撃する。これを食らった相手は血液量が低下するぞ』

『「精神」では相手の精神に対して攻撃する。これを食らった相手は血の気が引くぞ』

『最後、「特殊」は必殺技。とんでもない攻撃を放つ。食らった相手は大ダメージ。ただし服が一枚脱げるので注意だ』

『基本的には物理連打ですね』

『まあ、そこは自分のスタイルとの相談だね』

当然のごとく物理戦闘に特化した私は物理コマンドを選択。

『MP(まほおポイント)が足りません』

「は？」

『MP(まほおポイント)が足りません』

「は？」

『今の都季子ちゃんでは特殊コマンド以外選択できません』

何言ってるんだ？

「何をしていますのですか？ 来ないならこっちから行きますよ」

『ほら、都季子ちゃん。来るって言ってるよ。早く脱がないと取り返しがつかないよ』

「結局脱がず気じゃないですか……」

「食らいなさい、物理コマンド『悲しみの少女人形』」

『来たよ来たよ、早く脱げよピンク女！！』

本性現しやがったこの女。ピンクはお前だ。

「仕方ないですね、特殊コマンド『プリズミックストーム』！」

私を包むまばゆい光、その光で怯む敵。そして卑怯にも後ろに回り込む私、後頭部に狙いを定める私、ステッキを振り回す私、脱げる靴下。

「ふっ」

フルスイング。

ぼすっ。

とらえたと思ったが、それは人形だった。

「危ないですね。間一髪でした」

「とらえたと思ったのに……」

「変わり身は人形遣いの要、そう簡単にはやられません」

『よしっ、都季子ちゃんのニーハイゲッツ。この調子でどンドン行くよ』

脱げた服は変態の元に転送されるのか……。

「聖良さん、もう MP 溜まりましたよね。これ以上脱ぐ訳にはいきませんよ」

コスプレ衣装はまさかのワンピース型なので、脱げる時は一気に脱げる。ちなみにキャミソール等は着ていない。コスプレ衣装は暑いのです。

『溜まってないよ。もう一度特殊コマンドだよ』

「聖良さん、私を裸に剥こうと思ってますよね」

『あー、うん、思っ、ないよ？』

「おい」

『あれだ。正直に言おう。脱がずというのは表向きの目的で、真の目的は都季子ちゃんに直に触れていた衣服をゲットすることだ』

「あえて今まで言わなかったですけど聖良さんクズですよ」

『ごめん』

「まだまだ行きますわよ。今度は二倍、物理コマンド『夜明けを超える人形店』」

「チクショウ、やるしかないんですね。特殊コマンド『フローラルハリケーン』」

フルスイングで起こした強風で人形を吹き飛ばす。ブラジャーも吹き飛ばす！

「そっちが先に脱げるのか……」

『よし！ よし！ よし！！』

わかった。もうコイツは無視しよう。

「やりますわね。私も本気を……」

全力で走りだす私。

「お前が出す前に私が出す！」

『と、都季子ちゃんは、い、一体、な、何を出すの、かな、はあ、はあ……』

「不満不平愚痴、あるいは罵詈雑言」

もう守りなんて要らない。突撃あるのみ。コマンド制とかいう意味不明の茶番に付き合う必要性もない。

ただ向かってくる人形をナイフで突き刺す。

魔法少女っぽくない。大丈夫、私は「まほおしょうじょ」だ。

はは、凄いや。

認めたくなかった自分を認めるとこんなに強いんだ。

私、今、最高の気分。

「あああああああああ、私のお人形さんーーーー」

「とりあえず聖良さん、返してください」

『私があこのシステムを構築するのにどれだけ時間がかかったと思ってるの？』

「その時間は無為です」

『簡単じゃないんだよ。下着だけを転送するのは』

「無駄な努力じゃないんですか」

『お色気成分はね、何よりも重要なんですよ』

「お色気担当は新しく入ったじゃないですか。私はクール系美少女担当で」

『クール系美少女のお色気も必要。エロさは胸の大きさに比例するという論を私は批判する』

「お色気担当が飽和しませんか」

『エロさは飽和しない。人の性欲は無限大だから』

「それって聖良さん個人の話ですよ。私にはそんなもの存在しません」

『存在しないってわけじゃないよね。無かったらそれはそれでおかしい』

「誤解を招く表現を使ってしまいましたね。そんなものはあまり重要ではない、という意味です」

『結局それも、都季子ちゃん個人の問題だよ』

「はい。ですが聖良さんのより一般的かと」

『それはね、本当のお色気を見ていないから言えるセリフだよ』

「本当のお色気とは」

『はあ、これから見せてあげるよ、本当のお色気を！ このはちゃんの下着を転送！』

「おいやめろ変態」

.....

.....

……

…

『都季子ちゃんよ、これがお色気だ』

「胸がたゆんたゆんしてただけじゃないですか」

『それがエロい。シンプルにエロい。究極のお色気』

「結局大きじゃないですか。私がそんなことをする必要はないですよ」

『つまりお色気担当をすべてこのはちゃんに押し付けると？』

「<……」

『自分が脱ぎたくないから人を脱がす』

「……」

『エロくないから、お色気担当が飽和するから、そんな理論で武装して言いたいことは結局自分がエロい格好をしたくない』

『それっておかしいよね』

『全てこのはちゃんに丸投げしてるだけじゃないの？』

『自分勝手な行動。そんなので世界を救えると思えるの？』

『誇り高きブラジャーを胸に、パンツは尻に。そういうことじゃないの？』

『君はまだまだだよ。何もかもが足りない』

『ここから帰結されるのは即ち』

『君も、脱ぐんだよ……』

「いや、そもそもお色気担当とか要らないです。気持ち悪い」

戦いには勝利した。

友情、その他を犠牲にして。

『もう都季子ちゃんなんて知らない』

「それはこっちのセリフです」

「はわ、はわわ。喧嘩はダメですよ」

険悪な雰囲気の中、進む。それが私の責任だから。

行動と責任。そして私の使命。

やるべきことはやる。

仲良しごっこがしたいわけではない。

聖良さんは言った。世界を救うと。

それはあながち間違いではない。

しかし、虫の居所が悪いのも事実。ネコちゃんには迷惑をかけている。

先輩なのに、申し訳ない。ただ、聖良さんのセクハラをスルーできるほど私は純粋ではない。

純粋少女失格。

まあ、仕方のないことが。

『その扉の先だ』

「はい」

なんの注意もなく扉を開ける。

そこには、スーツ姿の女の人がいた。

「ここまでご苦労だった」

直感が告ぐ。

まずいと思った。戦闘の後で、戦力は？ 疲れてない？ 本気を出せる？ 全力出して勝てる？

ああ、血の気が引いた。

「先も言われたと思うが、帰れ。さもなくば」

私達じゃこの人に勝てない。

「ここで……」

『させないよ』

聖良さんが目の前に現れた。

「聖良さん……」

「いざこざは一旦忘れろ。流石に君達だけに任せられる相手じゃない」

「ほう。財前聖良、こんな大物がやってくるとは……」

相手は聖良さんを知っている？

「やっぱり知ってたか。だから来たくなかったけど、仕方ないな」

安心した。聖良さんだったら大体の相手には勝てる。この人は聖良さんにまかせて、私とネコちゃんは純粋少女の救出に向かうべき。

「聖良さん、任せていいですか？」

「ああ、その際に君達で頼むぞ」

「はい。いくよ、ネコちゃん！」

「は、はい！」

聖良さんの攻撃方法は単純明快。触れた相手と一緒に瞬間移動で上空へ飛び、手を離し、聖良さんだけ瞬間移動で地上に帰還。相手はそのまま真っ逆さま。非常に簡単だが強力な方法だ。

聖良さんは相手の背後に瞬間移動する。そしてそのまま、

「甘い！」

強烈な回し蹴り。聖良さんは吹き飛ばされた。

「私の背後を取れると思うな」

「聖良さん！！！」

まずい。まずいまずい。聖良さんがやられた。死ぬ？ いや、そんなことはない。でもどうする？ 私じゃ、何も。

「キコちゃん……」

ネコちゃんには酷いことをしたと思う。関係ないのに巻き込んで……。だから、せめて。

「キコちゃん、私が食い止めるから、救出をお願い」

「でも……」

私と聖良さんは覚悟をしていた。いつかこんなことになることを。だから任務は絶対に成功させなくちゃいけない。そして、ネコちゃんは生き残れるように。だから、

「勝てない相手でも、戦わないといけないんだ」

「行って、ネコちゃん。私が勇敢な間に」

「う、うん！」

「いいのか？」

「いいわけないですよ。それで、あなたはいいんですか？ 私の仲間が救出に行きましたよ」

「もちろんいけない。だから、まずは君から始末しよう」

「そうですか」

「やれるもんなら、やってみてください！」

ステッキと仕込み刀を組み合わせる。

聖良さんから対一般人使用を禁じられた、私の最高火力。

「魔炎装度、発動」

あとがき。

前半と後半のテンションが全く違うけど、同じ日に書いているんだぜ、コレ。謎のスーツ女戦を終わらせるぐらいまで書きたかったけど、まあ、今回はこんなもんかな。×切過ぎてみんなに迷惑かけてるし。来月はもっと進むよ。

というわけで次回も頑張ります。

キユウセイの魔女とその騎士

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

マキナは咄嗟に腰の鞘へと手をかけた。机に飛び乗り斬りかかれば、数瞬で刃は目の前のローザに届くはずだった。

「……………なっ！」

しかし、剣士として非凡な才を持つはずの彼が、ただ剣を抜かんとする一瞬の間に、彼の首には鋭い爪が突きつけられていた。

「すいません。ベアトさんは人をからかい過ぎるくらいがありました」  
指先から腕の一部を獣のそれへと変貌させた少年、シシトラは獅子の如き剛爪をピクリとも動かさず申し訳なさそうな苦笑いを浮かべていた。

「その腕、動かさないで下さいよ」

「……………驚きました。話には聞いていましたが——」

優位に立つはずのシシトラが焦るような口ぶりを見せる。

「これからデイナーだというのに、血なまぐさいのは良くないな」

「全くね。食事前に嫌なもの見せるんじゃないっての」

聖装と呼ばれた二人は事態に動じることもなく、心中穏やかじゃないマキナとシシトラを宥め始めた。

「俺も剣を置きますから、シシトラさんも腕を引いて下さい。……今なら動くでしょう？」

「……………そうみたいですわね」

マキナとシシトラが共に得物を収める。シシトラの腕は彼の意思ですぐさま人のものへと戻っていた。

「元はと言えば、ミスティさん達が喧嘩腰で出てくるから悪いんですよ？ お互い余計な緊張を——」

「何、シシトラの分際で私に文句があるの？」

「いや、文句と言いますか……」

ミスティと呼ばれた赤髪の少女がシシトラに詰め寄る。

「確かに登場の仕方に問題があったかもしれない。なによりマスターを驚かせてしまったね」

「えっと、これは一体何なのかしら？ 一体何なのかしら？」

「落ちて着け。事態が飲み込めないのは分かるが危険はない……多分」

先ほどまでの会話についていけないどころか、自らも携帯していた杖が突然の人の姿をとったこともあり、アデルは助けを求めるようにマキナへと視線を向けていた。心なしか目が潤んでいる。

「あらあら、ごめんなさいねえ。さすがにここまで反応がいいとは思わなかったのよ。あ、因みに空席が出来たのは偶然だからね？ 話を

通した酒場のマスターから、マキナ君の付き添いは二人になりそうって聞いていたものだから」

それは恐らくノエルのことであろうとマキナは納得した。偶然彼女の師匠がアトリエを空けなければ、この晚餐に彼女が付いてきたかもしれない。

「ま、お互い積もる話があるようだけど、まずは食事にしでしょうか」

ローザの掛け声に場の全員が同調した。外から様子を窺っていたらしい給仕が、早速前菜を運んで来た。

「で、どうしてメメの事をすぐに私に伝えなかったの？」

「いや、証拠もないのに説明したところで信じてもらえるか不安だったし……」

アデルの追及にマキナは目を逸らしつつ答える。弁明は確かに筋が通っていたが、極めて重要な事柄だけにアデルも不満を持たずにいらなかった。

因みにメメというのは白髪の少女、廻杖メモリの事であったが、個人の名として呼ぶには不便だったために本人の意向でメメと呼ぶことになった。

同じように、ミスティと呼ばれた少女もまた本来の名を持つ。

『秘冠ミスティカリナ』。ミスティと呼ぶことを許可してあげる」

まるで自分が絶対者と言わんばかりの高圧的な態度は、誰が相手でも変わらないようだった。

「私はてっきり、メメちゃんのマスターは勇者の血を引くマキナ君だと思っていたのだけど、違ったのね。女の子の姿になったのも、君の趣味で行ったとばかり」

「止めて下さいよ。僕はそんな嗜好は持ち合わせていません」

ジャガイモのスープを飲みながら、ローザは驚いたように話す。

「聖装は人には決して扱えない。ここでいう人とは所謂純粋なニンゲンのことね。勇者の血ならば、あるいは人の枠を外れるかと思ったのだけど……」

「コイツに私や妹は扱えないわよ。どれだけ魔力があったところで、ニンゲンには違いないから」

ローザの考察をミスティはあえなく否定する。彼女は濃い赤の野菜のみを丁寧を除きながらサラダを食べていた。

「はあ……。ミスティさん。お皿をこっちに」

料理を残すことに抵抗があるのか、シシトラはミスティがより分けた野菜を次々口にする。

マキナは早速メメやミスティたちへと立て続けに質問する。

「二人は姉妹……で合ってるんですよね？」

「そうだね、私たちは同じ人の手によって生み出されたから。ミスティの方が僅かに私より早く生まれた」

メメはマキナの問いに答えるが、彼の疑問は尽きない。

それは当然のことでもあった。広く大陸について学び、積極的に未知を求める彼も、意志をもち人の姿をとる魔法具など聞いたことがない。彼女たちは、その道のエキスパートである錬金術士にさえ否定されるような存在だ。

「一体誰なんだ？ そんな、神の御業のような——」

「その問いへの答えを私たちは持ち合わせていない。……そうでしょう？ 愚妹」

「……やっぱり、姉さんも何も覚えていないか」

「マジですか」

予想外の返答に、マキナは渋い顔をする。

「私が目覚めたのはつい昨日。これは推測だけれど、私は数百年の間眠っていたんじゃないかな。私が知っているのは私自身のこと。それから、姉妹のことぐらいさ。もちろん一般的な常識も記録されているけど、それがどこまでこの時代に適合するやら」

「同じよ。目を覚ましたのはつい最近。姉妹に会えれば何か分かるか

と思ったんだけど……姉妹全員が同じ状況なのか、あるいは私とアンタだけなのか。……この私がローザにわざわざ頼んだっていうのに」

ミスティは吐き捨てる様に言った。隣のローザは残念そうな素振りしながらも、ニヤニヤと隠しきれない笑みを浮かべつつ、からかうように言う。

「そうよね。せっかく、『行商なんてやってるんだから、ついでに私の姉妹も探さないよ……別に、手が空いてたらでいいから』なんてお願いしたのにねえ」

「わざわざ似てない猿真似してんじゃないわよ！」

「二人とも落ち着いて。……ミスティさんはもう少し慣れて下さいよ。この人にはもう散々からかわれているでしょう」

「うっさいわね。どうして私の方が対応してあげなきゃいけないのよ！ この女が態度を改めるべきでしょうが」

「もう、ミスティちゃんったらそんなに怒ってばかり。ストレスは女の肌の天敵なのよ？」

「誰のせいだと思ってるのよ！ ……ねえほらシントラ、アンタもこの女に言っただけじゃないよ！ この私を散々馬鹿にしゃがってムキ——」

「ミステイさんが良い反応ばかり返すから、面白がってベアトさんも繰り返すんですよ」

「シントラ君は私の従者だもの。いっだって私の味方よねえ？」

「ベアトさんもこの人が怒りっぽいのが分かってからかうのは止めて下さい。少なくとも僕を巻き込むのは！」

「誰が怒りっぽいって？」

シントラは必死に二人の仲裁役を努めていた。喧嘩というよりは、ローザが一方的にミステイをおもちゃにしていると聞いた方が正しいだろうが。

「ホント好き勝手な女性方だな。同情するぜ」

「聞こえるわよ。……まあ、私も否定はしないけど」

横でマキナとアデルが小さく言葉を交わす。

「あの、次の料理運びに参りましたが……」

「ほら、ミステイさん！ メインディッシュですよ。お肉ですよ」

「あんた、私の機嫌が料理程度でとれるとでも……まあ、冷めないうちにさっさと食べようかしらね」

「やっぱりミステイちゃんはチョロ——」

「ベアトさんは黙ってて！」

シントラが、もう繰り返させてなるものかとばかりに遮る。

対岸の火事とばかりにマキナ達は舌鼓を打っていた。

「これ、本当に猪の肉なのか。俺の知ってる猪肉はもつと固くて臭みが強いものなんですけど」

一口入れて驚きの表情を見せるマキナ。

「凄く柔らかいし、豚に比べて油の旨味が段違いだ。そこらの屋台で食えるものとは訳が違う」

「ホントね。私も何度か捕らえた猪を食べたことあるけど、正直褒められた味ではなかったわ。ソースも肉の油に合っていて、到底同じ食材とは思えない」

「むぐむぐ。今日の睡眠はいいものになりそうだね。これだけ素晴らしい料理を味わって眠れるんだから」

野菜を長時間煮込んだソースがかかった猪肉のステーキに、三人が各々感嘆を漏らしていると、ローザはよくぞ聞いてくれましたとばかりに解説を始めた。

「ここは一つ、シェフの代わりに私が説明しましょう。ここで使われている猪はね、ついさっきまで生きていたのよ。殺してしまうと、その瞬間から肉はどんどん固くなっていってしまうから」

「じゃあ、山で捕えて生きたまま運んできたんですか？ 暴れるだろうに、よく抑えられますね」

「いいえ、緊張させて負荷をかけても味は落ちてしまう。だから、眠らせて運ぶことにしたの。マキナ君、その方法に心当たりはない？」

ピタリと、マキナが食器を持つ手を止めた。

「まさか、父さんの研究……。いや、あれって本来は——」

「そう、あなたの父上が医療の為に生み出した麻酔を、私なりに使ってみたのよ。昔、獵師に『都会のモンは本當の猪肉を知らない』なんて言われたものだから。コストは莫大だけど、まあ客は金に困ってない商人や貴族が相手だから、十分回収出来たわ。……父親の研究がこんなことに使われて不快にさせてしまったかしら」

「こんなに旨いもの食べさせてもらって、そんな感情湧いてきませんけど……」

「この料理が食べられるのはあなたのお父さんのお陰なの？ それは感謝しなくてはいけないわね……。どうかしたのかしら？」

アデルが笑顔でマキナに語り掛けるが、あまり嬉しそうな様子を見て疑念を投げかけた。

「俺の父親は医者なんだ。そして、麻酔を用いて世界初の外科手術を行った。……簡単に説明すると、麻酔で眠らせた患者の肉を切って、体に深刻な悪影響を与えていた部分を切除した」

「手の付けようがないと言われていた患者を無事に治療したのよ。まさしく医学の歴史に名を残す偉業……。ではあったんだけどねえ」

「え？ 凄いい話じゃない。何か問題があったの？」

「エルシオン教っていう、大陸最大の宗教があるんだけどな。そのこの売りの一つに、治癒の奇跡というものがあってだな。薬やら呪術やらで内面から病を治そうとしていた。父さんのやったことはその正反対の御業に真っ向から喧嘩を売る行いだったわけだ」

「異端審問を受けているって、そういうことだったの。何も落ち度なんてないじゃない」

「悪かどうかはあつちが決めるからな。東大陸にもそこら中に教会があるから困ったものさ。酒場にアリアっていたら？ 彼女もそのシスターだ。まあ、あの人は飲兵衛だが話が分かる人だし、この件に関しても教会に否定的だけだな。まあ、教会の言うことを鵜呑みにして異端者を排除しようとする信者は沢山いるわけだ」

「それでもこつちの大陸だと自由主義が一般的だし、神の教えを律儀に守る人も少ないと思うわよ？ 私の出身のオールズだと、近年急激に信者が増えてるらしいわ。貧富の差が大きくなるとやっぱりね」

マキナはふと父の姿を思い出す。

「家族が心配？」

「別に信者に襲われて……みたいなのは気にしてないですけどね。あの人身魔法使えるし、なにより今は隣に母がいるはずだ」

「あなたのお母さん、勇者の血を引く御方ね？　どんな人なのかしら？」

ローザが目を輝かせて尋ねる。勇者について、彼女は並々ならぬ情熱があるらしい。

「直接会ったことありませんか？　あの人を一言で例えるなら……そうですね、恐ろしく器用に剣を振り回し、更には魔法まで使いこなす猪……ですかね」

皿の上のステーキを見ながらマキナが語った。

「えーと、まっすぐな人ってことで——」

「いえ、見た目が猪です。大女、と言われてイメージする見た目を更に一回り大きくしたぐらいです。突進すると身体強化<sup>エンハンス</sup>抜きで戦士が数人吹っ飛ばされます」

アデルのフオローもそこそこに、マキナが捲し立てた。

「俺も妹も、父親似で良かったというのは家族の共通認識ですよね。

……あ、なんか期待してたような話が出来すすみません。武勇伝なら山ほどありますよ。あの人戦闘力おかしいですからね」

はあ、と溜め息を吐くマキナ。慌ててローザが話を変えた。

「ほら、勇者と言えば詩魔法があるじゃない。その話でも聞かせて欲しいわ。ほら、さつきシシトラ君に使ったでしょう？」

ローザが、食事をしていたシシトラに目配せした。

「ああ、ビックリしましたよ。突然腕が自分の物でないような動かなくなつて。……言葉で人の心に干渉するという話でしたな」

「種はバレてましたか。動くなど言えば動けませんし、怒れと言えば感情も揺さぶれません。強い意志で抵抗されると効き目が薄いですけど」マキナは自らが持つ特別な力について語る。

「勇者はその力で大軍を率いたのかしら。資料には細かい記述がないので分からないわ。そもそも、かつての勇者にその力があつたのかしらね？」

「どうなんでしょうね。遥か上の代からあつたと聞きますけど、さすがに数百年以上遡つては残つてないですし。それにこの能力は……」

「能力は？」

「いや、何でもありません。それよりも、僕はここにいる二人の話を聞きたいですね。覚えていることだけでも教えて欲しい。聖書の持つ力、詳しく知っておかないと」

メメは申し訳なきように言った。

「すまないな。私も君に答えられることは少ないんだ」

「まあ、少しがつくし来たけど。知らないものは答えようもないしな」  
メメを慰めようと、マキナが頭を撫でた。

「……む、子ども扱いしないでほしいな」

「ああ、確かに俺たちよりずっと年上なんだよな。でも、見た目はまんま子どもだからなあ」

否定的な言葉を出しつつも、満更でもない様子でメメはされるがまま身を任せていた。自分をさておいて親密そうな一人に、アデルが不満感を露わにして問い詰める。

「それで、何で持ち主である私に顔を見せなかったの？」

「いや、眠くて起きられなかったから——」

「はあ？」

「ひっ」

アデルが鋭い眼光で見据えると、メメは小さな悲鳴と共に後ずさった。

「待て、待て。何百年も眠ってたんだぜ？ そんなタイミングよく起きるっていうのも酷なんじゃないか？ な？」

「その話も私は余り信用出来ないんだけど。だって、それだとあんな田舎の村にある蔵にずっと眠ってたってことよ？」

「ん？ メメを渡してきたのは死神を名乗った女だろ？ いや、その人についても色々疑問はあるけど」

マキナの問いに、アデルは思い出すように答えた。

「火の手が回る村で、竜にせめて何か出来ないかと村の地下にある蔵に駆け込んだのよ。そこで色々見繕っている中に杖はあった。もちろん、魔法なんか使えないからその時は無視したけどね。良さげな武器はあったけど、結局——」

「これ以上言う必要はない。それだけ聞いたら、十分だから」

「……………そう」

悲劇が脳裏に浮かぶ、すんでのところでマキナが言葉を遮った。アデルは片腕で自分を抱きしめながら唇を噛んでいた。

「……衝撃の事実ね。あなたの村は何処に？」

「ここから少し離れた山中に。丁度あなたがマキナに依頼した目的地の近くです」

「あら？ そんな場所に村なんてあったのね。知らなかった……」

「所謂ド田舎という奴です」

「少し引つ掛かるけど、まあ事実として存在しているわけだから無駄ね。話を進めましょう」

ローザに促されメメが口を開く。

「私の持つ能力について、マスターに詳しく説明しておこうと思う。マキナにも聞いておいて欲しい」

「ええ、聞きましょう。あなたの力はきつと私の目標を叶える為に必要なから」

マキナは心配そうにアデルを見ていたが、彼女は気丈にも顔を上げてマキナを見据えた。その眼を見て、マキナは認める様に頷いた。

「私を手にしたときに、マスターは基本的な使い方を理解したはずだ」  
「ええ。杖をかざし願うことで、壊れた彼の体に代わる器を作った」

その時のことを思い出すようにアデルが頷いた。メモが亜半紙を続ける。

「そう。それが私の力だ。魂の器を作る力。簡単なものなら無からでも生み出せるよ。マキナに関してはとても苦労して調整したけどね」

「……本来男だから、か？」

マキナの言葉に、メモは困ったように首を傾げた。

「そうだね、それもあるのだけど。君の持つ特別な力……確か詩魔法と言ったね」

「それが関係あるのか」

「普通の肉体を生み出すなら、元の本人の肉体情報があればいい。性別を変えたいなら適当に見繕って他人の情報を混ぜ合わせる。ただ、

今回は君のその特別な力を保持するために、私の中に記憶されていた君と同じ力を持つ女性を呼び出したんだ。だから、姿が変わっても同じ力が使える。むしろ、前よりも強力になったかな？」

「あれは女になったからじゃなくて、そういう理由だったのか。とすると、この体はもしかしてご先祖様、かもしれないわけか」

びくりとローザが反応する。

「可能性はあるね。誰なのかは私には思い出せないけど」

「もしかして勇者本人だったりして！？ 勇者の性別は未だ確定していないし、可能性はあるわよね！」

「勇者の名前も分かりませんし、知る術は無いですね。後で名前だけでも調べてみます。彼女の分の魔力を捻りだせば分かるはず……出来るかは疑問ですが。ま、続けてくれ」

マキナは床に置いた鞆から、手帳とペンを取り出してメモを付け出した。

「特別調整を加えた肉体は生者のものと変わりない。一度定着すれば私からどれだけ離れても平気だよ」

「それは助かる。昨日実験も兼ねて風呂屋まで手ぶらで向かったが、結構ビビリながらだったしな。大丈夫と分かったなら安心だ」

「使い捨ての器を与えれば、その場限りで死霊を使役することも出来るよ。戦場なんかでは役に立つかもね。ただ、怨念の方向性にもよるけど」

「禁忌術士ネクロンサーみたいなものか。教会が目の敵にしてる。うかつには使えないな」

「そもそも怨念が周りにいるってかなりレアケースじゃないかしら？」  
「「もつとも」

マキナはペンを走らせる。

「他に、私は私の作った肉体になら干渉できるから、マスターやマキナの肉体を強化することも出来るよ。周りに使役できる魂がないときはこの能力を使うことがほとんどだろうね」

「これは身体強化エンハンスか。いや、他人にもかけられるなら上位互換になり得るな。俺自身の魔法と重ね掛け出来るのだろうか」

「その力の範囲はどれぐらいかしら？」

「死霊の使役も同じだけど、私の力の多くは大体三キロメートルまでは届くよ。それより離れるとマスターの集中力が問われるかな。因みにメートル系っていう単位は——」

「大丈夫だ。多分昔から変わってない」

「分かった。まあ、そんなところかな私の説明は」

マキナは何度か頷いた。彼なりに情報を整理できたようだ。

「……思うにメモ。君の力を戦争で使ったら大変なことになるんじゃないか？ 死んだ味方も、再び立ち上がらせて戦わせられる。魂を操作するわけではないから、敵兵までもとはいかないみたいだが」

「まあ、人間の倫理的には問題があるだろうね。でも、私はそういうものとして生み出されたから」

「結局は使い手の心が次第と言うわけだ。どんな道具もそれは変わらないな」

「恐ろしいと思わないのかい？」

「思ったとして、それを君に言うべきではないだろう。言うなら作り手にだ。俺は感謝するけどな？ だって今ここに立っていられるのは君とアデルのお陰なんだから」

「……………ふむ、そうかい」

マキナの返しが意外だったのか、メモは照れを隠すようにそっぽを向いた。

「さて、今度はこちらの順番かしらね。ミスティちゃん。お肉に夢中なミスティちゃん」

「はっ。だ、誰が食い意地張ってるってのよ。馬鹿じゃないの？ 自然の恵みに感謝してるだけなんですけど！」

「いや、そこまで言っていないわよう……?」

声を掛けられて我に返ったミスティが、慌てて応答した。

「何でわざわざ部外者に力の説明なんてしないといけないの? とうか向こうには愚妹がいるんだからそれに説明させれば……」

「ここで私たちだけ隠すのはフェアじゃないでしょう。誰が説明することも結構大事なことなのよ?」

「そういう発想、ホント人間って面倒くさいわね。まあ、いいでしょう。秘冠の力を語ってあげるわ」

マキナがごくりと唾を飲んだ。目の前の存在が人知を超える力を持っていることは、彼女の妹が既に物語っている。

「自己と絶対者との合一。かつて、君主は自身を神の代理人とすることでその権力を正当化した。王は見えざる神の力を用いて民を良き方へと導く。冠はその証」

ミスティは人差し指を立て、試すように語り掛けた。

「さて、ここで問題よ。いついかなる時も働き続け、しかしその実を見ることは出来ない力。それは一体どんな力でしょう?」

ミスティからの突然の質問に、マキナは戸惑いながらも思考する。

「見えない……? 風ですかね」

「いいえ。でも、遠からずと言ったところかしら」

「王が出てきたのだから、分かりやすく権力とか?」

「概念的なものとは違うわね。よって答えから離れた」

「……ん、分かったかもしれない」

マキナがハツとしたように顔を上げ、何度か確認するようにまた俯く。

「マキナ、さつさと言ったらどうなの。メメは知っているのよね?」

「まあね。姉はやけに勿体ぶった言い方するけど、別に大した答えでもないよ?」

「興が削がれるようなこと言わないで頂戴。そうね、見えない、というところから考えると案外たどり着けないかもしれない。大事なのはいついかなる時も、の方かしら」

「……どうやら、俺の考えは当たっているみたいだ。アデルは?」

マキナはニヤニヤと笑みを浮かべながらアデルに問いかける。

「待ちなさいよ。本当はマキナも分かってないのじゃないかしら!? ほら、分からないけど分かっているフリしているんでしょ?」

「そう言われちゃあ黙っていられないな。では答えて見せよう。ミスティさんの力とはつまり——」

「おい、待たんか!」

マキナが自慢げに口を開こうとした瞬間、怒声が響き部屋の中に男が駆け込んできた。

「べ、ベアトリクス……ベアトリクス……」

入ってきたのは二人組。声を上げていたのは後から追ってきた老年の男の方で、先ほどから何度か料理を運んできた給仕だった。

もう一人、年若い男の方かというと、覚束ない足取りをしながらぶつぶつと何事かを呟いていた。

「新入り、何をやっているのだ！ 大事な日に無断欠勤したと思ったら、何も言わずフラフラと！ ベアトリクス様、申し訳ございません！」

コイツは今すぐに——」

「待って！ あなたは離れていてください。ベアトさんッ！」

「んー？ あらあらこれは……」

シントラが叫ぶ。同時に、若い男は目を血走らせながら、ローザへと飛び掛かった。

「べ、ベア……ベアトリクスウー！ か、はッ」

「王の御前であるぞ、下民が」

ミステイが低く冷たい声音で威圧する。言葉だけではない。男は地面に縫い付けられたようにもがいていた。手を伸ばしローザに触れようとしたところで、その拳もミステイが踏みになる。

「下民の分際で、全くいい度胸じゃない。王の晚餐に水を差して、生きて帰れるとは思わないことね」

「べ、ベアトリクスウー！」

「それしか吐けないのか、この虫ケラが」

ミステイが高く足を持ち上げ再度踏み抜く。手の甲から何かが砕けるような音がした。

「ベアトさん、言うまでもありませんが、この方は……」

「そうでしょうね。まさか、客ではなく従業員に紛れ込ませるとは」

ローザが小さくため息を吐く。

「ベアトリクスさん、これは一体……」

「どうやら最近、私たちのおっかけがいるみたいだね？ 熱烈なアプ

ローチは嬉しんだけど、本人が顔を出さないのよねえ」

「この男性は犠牲者です。僕たちを狙っているのは吸血鬼。人の血を吸い従える魔族です。恐らく僕たちを襲わせるためにどこかで噛まれてしまったのでしよう。こうなった以上、正気に戻す術は……」

シントラは申し訳なきように給仕の男に言う。

「部屋の外に出て下さい。レンカートさん達も。不快な思いをさせてしまいます」

彼の言葉から、これから何が行われるのかは明白だった。

マキナは慌てて問いかける。

「ほ、他に噛まれた人は？　もしかして、街の中に吸血鬼が……」

「いえ、その心配はないでしょう。向こうの詳しい目的は明らかでないですが、これまでの動向から内密にことを成そうとしています。不特定多数の犠牲者が出ることは考えにくい。吸血鬼の僕、使徒には感染力はありませんし、命令に背いて人を襲うこともない。しかし、一度なつてしまったのなら、命を奪う他に彼らを自由にすることは出来ません」

「つまり、殺すと」

「まあ、そうなりますよね。大丈夫ですよ、今回が初めてというわけでもないのよ」

シントラは、さも大したことではないと言いたげに語った。人と獣人では価値観が違うのだろうか、とマキナは考えかけたが、隣に座るローザやミステイの様子から、それが実際によくあることなのだと理解した。彼らは降りかかる火の粉を払っているだけなのだ。

「あの……」

アデルが控えめに手を挙げた。何かを言いたげにしている。

「メメの力があれば、もしかして何とかなるんじゃないかしら、と思つたんですけど……どうでしょう？」

マキナとシントラは顔を見合わせた。

「で、出来るのか？　メメ」

「そうだね。結局、一度死体になつてもらわないといけないけど」

給仕の男だけを部屋から出して、中にはマキナたち、ローザたち、そして今なおミステイの力で地面に横たわる青年が残った。

「では、行きますよ。レンカートさんは後ろを向いていた方がいいかと」

「言われなくてもそうしますとも」

マキナとアデルが男から背を向けるとすぐに、男の呻き声と血肉をかき分ける水音が響いた。そしてそれがすぐに止む。

メメの力を使うため、どうしても対象を見据えなければならぬ。アデルは勇気を振り絞り向き直る。

「……ふう」

「なるべく嫌な思いをしないよう、心臓だけ取り出してうつ伏せにしました。血も見えないでしょう？」

「説明は結構ですので」

鼻につく臭いだけでもどうにもならない。アデルは吐き気を抑えながら杖へと姿を戻したメメを握りしめ念じる。

「……………ッ！」

アデルは作戦実行前のメメの言葉を思い出す。

「肉体という器が機能を失ったとき、魂は器を捨て飛び出す。強い思いがあればそこに留まるだろう。そうでないのなら、魂が消滅しない内のスピード勝負さ。何、元の肉体を再利用するのだから難しい話じゃないよ」

念じると共に見据える。彼女の瞳に揺らめく青い筋が見えた。それが魂の輪郭なのだろうか、と考える間もなく、廻杖メメントモリはその力を發揮する。

「……………かひゅつ。は、はあはあ」

男が息を吹き返した。胸の傷も綺麗に消え去っている。

「これが、メメちゃんの力か」

「摂理の外にある力ですね。ミステイさんたちを生み出した方は一体何者なのでしょうか」

「確かなのは、遥か昔の存在って事ぐらいね」

ローザ達が口々に感嘆の言葉を吐く。

「あ、あの。僕は一体…………」

「どう説明したものかしら。死にかけていたあなたを、そのアデルちゃんが救ったのよ」

「それは、何と感謝すれば……………！ 本当にありがとうございます！」

朝、食材の調達に市場に向いて、それからの記憶がないのです。確か、女性に声を掛けられて…………」

「待って。あなた、誰に嘔まれたか覚えているのかしら？」

「嘔まれた…………？ そうです！ 私はあの女に嘔まれて、ベアトリクス様を襲えと…………ああつ、私は何ということをし！」

「いえ、それは仕方のないことだわ。アデルちゃんとメメちゃんがいなければあなたの命を奪う他なかった。…………マキナ君。私たちはしなければならぬことが出来ました。今日のところはこれでお開きとしましょう。吸血鬼が街の中にいるかもしれない以上、あまり長く一緒にいるとあなた達も狙われるかもしれない。シストラ君、馬車の手配を。この街を出ます。あなたは、ゆっくりでいいから女の特徴を思い出して欲しい」

「ではレンカートさん、外まで送りましょう」

「行こうか、アデル」

「ええ」

三人が部屋を出る。

「オボロさま！ アイツは！？」

「無事です。僕はベアトさんに頼まれて馬車の手配を」

「そうでしたか！ 馬車の手配、それならば私めにお任せください。今すぐ用意させますので」

「助かります」

シントラは給仕の男に札を言うと、マキナ達を連れ店外に向かう。するとマキナは店内の様子を見て異常に気付いた。

「あれ、客が誰もいない。危ないから帰らせたのか？」

「いいえ。実は、今日客として入っていた者は全てベアトさんが手配した信用できる方たちだったのです。万が一客の中に吸血鬼が紛れ込むことがあれば厄介だったので」

「そんなことを……。つまり、部外者は俺たちだけだったと」

「別に、あなた達に危害を加えるつもりはありませんでしたとも。まあ、あなたが剣を抜こうとしたときはヒヤリとさせられましたが」

「か、かたじけない」

「いえいえ。みだりに秘密を知られることは危険ですからね。聖装のような話になればなおさらです。それに……。自らが既に死んだ身なんて、言えませんかよね？」

「……ッ！」

マキナは驚き振り向いた。メメの力は明かしたが、その事実は口にしていないはずだったからだ。

「やはりそうでしたか。獣の身ですから、人よりずつと鼻は利くんですよね……。ああ大丈夫ですよ、こちらの獣人では到底気付きません。

余程優れた感覚を持つ者……。知る限り、僕の他に数人しかいませんね」

「そうでしたか、それは良かった、かな？ まあ、あまり知られたくはないですからね」

「ところでレンカートさん。彼女は――」

シントラはアデルをちらと見て、何かを告げようとする素振りを見せた。アデルが振り返ってきよとんした顔をする。

「アデルがどうかしましたか？」

二人の態度を見てか、思いとどまったように口を閉ざす。語ったのは今宵の過ごし方についてだけだった。

「いいえ、何でもありません。夜道に気を付けて。僕たちは今日中には街を出ると思いますので、今夜は酒場など、人のいる場所で過ごすことをオススメします」

「そうですね、そうします」

「では、良い旅を。またどこかで会うかもしれません、その時は是非手合わせ願いたいものです」

「ええ、こちらこそ。アデル、今夜はマスターのところで潰すぞ」

「デザートでも食べようかしら。タイミング悪くそれだけ食べられなかった」

「ああ、そういやそうだな。何か適当に作ってもらうかなー」

そうして二人はその日を酒場で過ごすことにした。日が昇って宿に戻ってから、メメが人の姿をとることはなかった。どうやら眠りについたようであった。

続く

こんばんはT.Kです。

履修する授業はちゃんとシラバスを読んで選んでたんですが…何がいけなかったんでしょうねえ。□

情報が足りなかったのかな。

専門科目が軒並み面白くなくて、一般教養の心理学が1番面白いんですよ。

今期1番のアニメが宇宙パトロールルル子だったくらいの番狂わせっすよ。

リトルウィッチアカデミアにも大きな期待を寄せています



こんにちは、マウスです。

最近原稿も程々のページ数を出せているのでこの調子で頑張りたいです。

近頃プラトゥーンで苛つくことが多いですが、来月はカルドセプトで苛ついていることでしょう。□

皆さんはこんな駄目人間にならないよう。

## From Writers最低限の光

こんばんは、鶴和です。

先日大学で先生からありがたいお言葉頂いたので紹介しておきますね。

とりあえず寝ろ。□

以上です。

ところで今回の表紙なんですけど、いつものシリーズ？はお休みです。

雨が好きなのでこの時期はいつも雨の絵を描いてしまうんですね。

それでは

2016/06/27

17:18:39

ヒカルです。使ってるディスプレイが死にました。

ディスプレイはヒカルにとっての目、あるいは心そのもの。

世界と直に接することが出来なくなったオレを待つのは、偶然による悲劇なのか、それとも新しいディスプレイを買えという啓示なのか。

ヒカルでした。